

送り火

八月は火にまつわる行事が多い。各地の花火大会は八月が盛りだし、京では五山の送り火も八月の行事である。月末には地藏盆もある。いずれも火が主役の行事だが、火とは人にとって何だろうか。そもそも火は、動物としてのヒトを人にした立役者である。暖や明かりを取り、煮炊きし、また猛獣たちから身を守ってくれる存在だった。火はまた、生態系のコントロールにも使われてきた。山焼きには害虫を追い新芽の発芽を促す働きがある。東南アジアでも乾期の終わりに、からからに乾いた枯れ草に火をかける。そうすると土中に眠っていた種子の休眠が解け、いっせいに発芽する。不思議なことにここでは、生命を甦らせるのは水ではなく火である。若草山の山焼きも今は観光行事の色彩が濃いだが、もともとはイノシシや害虫を追い払い、ススキなどの若芽をよく育てる目的があった。火がなければ、人間は農業をしようなどとは思ひもしなかったであろうと私は考えている。

ゆらゆらとうごめく炎を見ていると、なにやら怪しい気分になってくる。火はまた人の心を燃え立たせる。あるいは嫉妬の心はめらめらと燃え上がる。火は人の心を映すのである。火はさらに、不浄を浄にするものだった。それは信仰の対象にもなり、拝火教の名をとるゾロアスター教のように火を祭る宗教までが登場した。火は私たちの暮らしばかりか精神活動を支え続けてきたのである。

それなのに火は、最近とみに悪者にされる。森を焼くことは森林破壊のいまや最たるものだ。東南アジアなどの伝統的焼き畑までが温暖化の元凶とばかりに指弾される。温暖化とダイオキシン問題で、寺院や公園の落ち葉炊きまでが、禁止されるか自粛に追い込まれた。家庭ではガスコンロの普及で七輪はとっくに絶滅危惧種だし、そのガスコンロも電磁調理器の普及で急速になくなりつつある。いまや火は調理の手段でもなくなりつつある。タバコ人口は減るいっぽうだし、香を焚くこともなく、マッチやライターがなくても不自由しない生活が当たり前になった。現代日本に生きる私たちは、ヒトを人にし、文明のおこりのもととなった火を、ほぼ完全に遠ざけてしまっている。現代の子どもたちの多くは、火というものを、テレビか何かで見かける「冷たい火」としか感じていない。火をあぶないものとして遠ざけられてきた子どもたちには、それはいまやバーチャルな存在でしかないのである。

こんな火のない暮らしはいつか破綻するに違いない。「環境にやさしい」火の使い方がきつとあるはずだ。それに大停電でも起きれば今の都会暮らしはなりたたなくなってしまう。火を使った調理をし、お盆には灯籠を流し、十六夜には送り火をみて亡くなった身近な人びとを思うというような暮らしが人間として必要なのではないか。さて今年はどこで送り火をみようか。